

# 七世紀における遣唐使の航海と沖ノ島祭祀の変遷

大高 広和

## はじめに

### 一、画期（過渡期）としての七世紀

沖ノ島における古代祭祀は、四世紀後半に始まり九世紀末頃まで継続して行われたことが明らかとなっている。岩上―岩陰―半岩陰・半露天―露天という巨岩に対する祭祀遺跡の位置の移り変わりは、祭祀に用いられた奉献品の変遷とともに、長く続く祭祀の中にも祭式などの変化があったことを窺わせ、日本固有の信仰の原型である神祇信仰の成立過程を考察する上で多大な知見を我々に与えるものである。

しかし一方で、なぜそのような変遷が生じたのか、そこに大陸との対外交流もしくは対外関係上の出来事の影響があったのかといった問題を科学的・客観的な形で証明することはなかなか難しい。とは言え、それはこれらの問題に関して研究の余地がないということでもない。そこで本稿では、特に大きな変化があったとみられる七世紀における対外情勢の推移と日本列島から海外に派遣された使者の航路の変化について着目し、沖ノ島の古代祭祀の変遷の背景を考えるための基礎作業としたい。

沖ノ島の古代祭祀上、最も大きな変化があったのはほぼ七世紀代のことと言つてよい。七世紀と言えば、厩戸皇子（聖徳太子）や蘇我馬子が政治の刷新を図り、遣唐使を派遣した推古朝に始まり、六四五年の所謂「大化の改新」、六六三年の白村江での唐・新羅連合軍への敗戦を経て、中央集権化策が進められた天智朝・天武朝などの時代があり、律・令ともに完備した日本初の法典とみられる大宝律令の制定（七〇一年）に至る、名実ともに激動の時代であった。

沖ノ島祭祀遺跡においては、岩陰祭祀の最終段階に位置づけられ、七世紀に入るとされる二二号遺跡において、それまでみられなかった金銅製の雛形紡織具や人形等が奉献されるようになり、古墳の副葬品とは異なる品が祭祀に用いられるようになる。二二号遺跡は岩陰を外れた部分へ須恵器が並べられるなど、次の半岩陰・半露天祭祀遺跡に近い様相を見せている。そして八―九世紀の露天祭祀への過渡期と評価されてきた半岩陰・半露天祭祀とされる五号遺跡は、七世紀後半頃に位置づけられ<sup>(1)</sup>、中国産の唐三彩長頸瓶

片や金銅製龍頭とともに、五弦琴や紡織具類等の金銅製雛形品や土器類等が発見されている。沖ノ島出土品とされる宗像大社神宝館所蔵の金銅製高機もあわせ、これらは伊勢神宮の神宝として鎌倉期の絵図<sup>(2)</sup>に見えるものや現代も神事に用いられているものと共通性をもっており、かつて井上光貞氏が沖ノ島祭祀を「律令的祭祀」ないしその「先駆的形態」が現れていると評価したところである<sup>(3)</sup>。また、金子裕之氏は、沖ノ島や神宮神宝等にみられる金銅製紡織具を女神との関わりで理解しており<sup>(4)</sup>、この見方に従えば、七世紀に入った段階で女神に対する祭祀が行われるようになっていたとみなすことも可能である。こうした新たな種類の奉獻品が現れてくる七世紀に、沖ノ島祭祀において大きな変化が起きていることは疑いない。

七世紀においては、沖ノ島のみにとどまらないさらに大きな変化があったと推定される。大島の御嶽山山頂（標高二二四<sup>(5)</sup>）に位置する御嶽山祭祀遺跡（大島御嶽山遺跡）は、二〇一二年に発掘調査が行われ、奈良三彩小壺や八稜鏡、滑石製形代や土器類等が出土し、沖ノ島の露天祭祀遺跡と共通性をもつ祭祀が行われていたことが明らかとなった。現在、宗像大社中津宮の本殿は御嶽山の麓に鎮座するが、弘治二年（一五五六）成立の「大島第二宮年中御神事次第」<sup>(6)</sup>に中津宮の「上宮」と記される御嶽神社の背後に位置するこの遺跡が、中津宮の起源にあたることは疑いない<sup>(7)</sup>。また、宗像大社辺津宮境内の丘陵上、高宮祭場の周辺にあたる下高宮祭祀遺跡においても、未調査ながら沖ノ島や御嶽山と共通する滑石製舟形などが採集されており<sup>(8)</sup>、『古事記』『日本書紀』に記される宗像三女神への祭祀がこれら三か所で行われていたことが確認される。御嶽山祭祀遺跡の古代祭祀の時期は七世紀末か

らと報告されていて、これを三女神への祭祀の考古学的な下限とすることができる。また、宗像三女神が沖津宮・中津宮・辺津宮の三宮に降臨し、地元豪族宗像氏（胸肩君氏）が三女神をまつているということは、八世紀前半に成立した『古事記』『日本書紀』の三女神神話（アマテラスとスサノオのウケヒの段）に記されるところだが、その内容は記紀の編纂が進められた天武朝までは遡るとみなすことができる。ここから、沖ノ島の神に対する信仰は、遅くとも七世紀後半（第四四半期）には三女神への信仰として展開していたと結論づけられる<sup>(9)</sup>。

以上のように、七世紀においては沖ノ島での祭祀の内容や祭式にかかわる変化、および宗像三女神に対する三宮での祭祀の開始といった、沖ノ島祭祀の変遷を考える上で非常に重要な現象がいくつも起こっている。しかしながら、それらが具体的にいつ、どのように起こったことなのか、七世紀のうちいつを画期とみなすべきなのかということについては、上記以上に明らかにすることは難しい状況である<sup>(10)</sup>。これらは沖ノ島で行われていた祭祀とその変遷の全容を明らかにしていく上で基本となる問題であり、様々な角度から検討が深められる必要がある。

そこで七世紀の対外関係史を一瞥すると、特筆すべきトピックとしては遣隋使および遣唐使の派遣や、白村江の戦いが挙げられる。特に遣唐使等の海外への遣使との関係は、沖ノ島の位置や唐三彩等の大陸より将来された豊富な奉獻品により、調査当時から重視されてきたところであり、以下、その具体的な様相を航路の変化に着目しながら見ていきたい。

## 二、七世紀前半の遣隋使・遣唐使の航路

中国王朝への遣使は、五世紀の倭の五王による南朝への遣使以降、およそ一世紀の間行われることはなかったが、西暦五八九年に約三〇〇年ぶりに南北朝統一を果たした隋に対して、推古天皇は遣使を行った。六〇〇年に派遣された遣隋使は『隋書』（卷八一東夷伝倭国条）にしか記録がなく、恐らく倭国にとって不都合な出来事があったとみられるが、六〇七年には小野妹子が煬帝に謁見し、不興を買いながらも翌年に使者裴世清を伴って帰国している（『隋書』、『日本書紀』推古天皇十六年四月条。以下、特記なきものは『日本書紀』による）。また同年、裴世清を送るため、小野妹子は留学生らとともに再度隋へ渡海した（同年九月辛巳条）。

遣隋使の航海ルートは、裴世清が百済經由で南に耽羅（済州島）を望みつつ対馬・壹岐を経て筑紫に至っていることが『隋書』にみえるので<sup>⑩</sup>、所謂「魏志倭人伝」の記述以来の壹岐・対馬ルートで朝鮮半島に渡り、半島西岸を北上し黄海を渡海して山東半島に至るルートがとられていただろう<sup>⑪</sup>。なお、六一五年（推古天皇二十三年）九月には前年に隋に派遣された犬上御田歙らが百済使とともに帰国しており、この時も百済經由であることが確実である。

六一八年に唐が隋に代わった後、六三三年（推古天皇三十一年）七月には、隋に留学していた僧らが来朝した新羅の大使とともに帰国し、唐は「法式備定之珍国」であって常に通交すべきであることを述べ、六三〇年に犬上御田歙らが初めての遣唐使として派遣された（舒明天皇二年八月丁酉条）。

彼らは二年後に唐の送使高表仁と新羅の送使らとともに対馬に到着し、高表仁は難波津まで行って<sup>⑫</sup>翌年にやはり対馬經由で帰国している。

以上のような日本列島と中国大陸との海上交通は、対馬海峡（朝鮮海峡）および朝鮮半島（もしくは遼東半島）―山東半島間を渡る以外は、地乗り航法<sup>⑬</sup>で朝鮮半島沿岸を経由する比較的安全なルートであった。このルートは一般に「北路」と呼ばれ、『日本書紀』白雉五年（六五四）二月条には「新羅道」という表現がある。しかし、新羅との関係が悪化する八世紀、つまり大宝二年（七〇二）に渡海した遣唐使以降は、五島列島から直接東シナ海を渡って中国の長江河口付近を目指す「南路」に代わったと考えられている<sup>⑭</sup>。安全なルートとは異なるルートが選択された理由としては、南路の方が航行距離が短く、煬帝の築いた大運河の利用も可能で、中国の都、長安や洛陽までの行程が短縮できるといったメリットがあり、造船や航海の技術の進歩が背景にあった可能性もある<sup>⑮</sup>。しかし、「南路」で唐へ向かった使節はほとんどが遭難・漂流の憂き目を見ていることからすると、やはり朝鮮半島情勢との関係を抜きには語れないだろう。

七世紀前半の東アジアでは、高句麗が隋による数度の遠征を退け、朝鮮半島で高句麗・百済・新羅の三国による抗争が続いた。そのため、朝鮮三国は互いに優位に立とうとして倭国との外交をそれぞれ展開しており、百済王子が人質として倭国に送られていたことや、加耶諸国を併合した新羅が「任那調」と称して倭国に貢調使を派遣したことなどはその一環である。この頃には多くの知識人や技術者が倭国へ渡ったことも『日本書紀』から窺われる。したがって、三国同士の緊張関係はあっただろうが、日本から

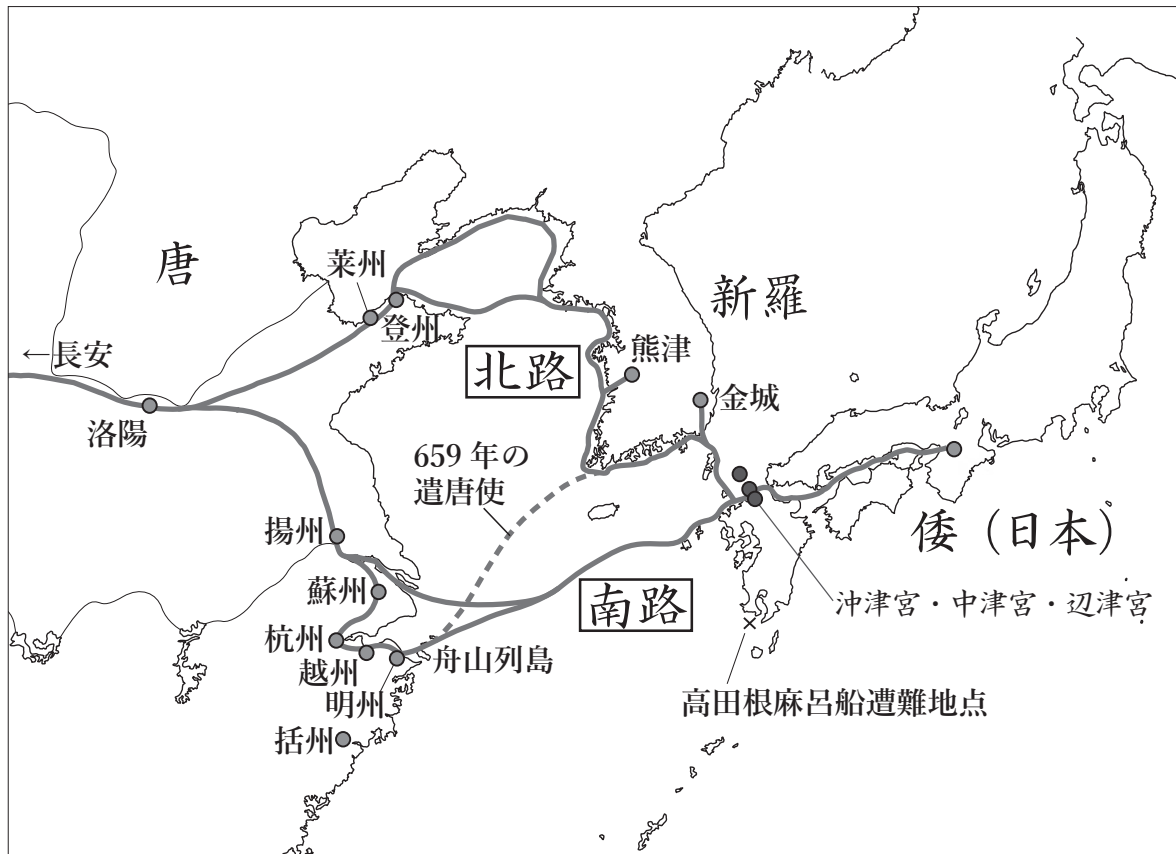


図 遣隋使・遣唐使航路図

中国までの海上交通に関わる政治的情勢は比較的安定していたと考えられる。ただし、中国と高句麗との関係は未だ決着しておらず、七世紀半ば頃からはその緊張が大きく高まっていく。

以上、七世紀前半においては、およそ一世紀ぶりの中国大陸への使節である遣隋使や遣唐使の派遣に関連して沖ノ島で祭祀が行われたことも想定できるが、その航海は前時代からの朝鮮半島へ渡る航海の延長線上にあった。したがって、この頃に金銅製雛形品等の使用開始といった変化を認めるとし、それは遣隋使を派遣するために起こったと言うよりは、国内的・内在的な理由（対外交流による影響を含む）によるのである。推古朝における改革との関連も想定されるが<sup>(16)</sup>、具体的には今後の課題としたい。

### 三、白村江の戦いと遣唐使の航路

既に述べたように、遣唐使の航路は当初「北路」で、八世紀には「南路」になったとされるが、「南路」への変化は航海の危険性の増大を意味しており、沖ノ島、もしくは宗像三女神への航海安全の祈りに影響を与えた可能性がある。そのため、航路の変化がいつ、どのように生じたのかを詳細に見ていきたい。

六五三年、一隻約一二〇人が乗った遣唐使船が二隻派遣されたが（白雉四年五月壬戌条）、そのうち高田根麻呂を大使とする一隻は薩摩半島と竹島（鹿児島県三島村か）の間に沈没し、五人だけが一枚の板につかまって竹島に漂着し、竹で筏を作って「神島」に着いて助かるという有様だった

(同七月条)。翌六五四年には、もう一隻の帰りを待たずに高向玄理を押使とした遣唐使が新たに派遣されており、こちらは二船で「新羅道」をとって山東半島北岸の萊州を経て京(長安)で高宗に謁見したという(白雉五年二月条。帰国は齐明天皇元年(六五五)八月戊戌朔条)。一方、六五三年に出発したもう一隻の大使である吉士長丹らは、六五四年七月に新羅・百済の送使とともに筑紫に帰着しており、唐の皇帝と謁見して文書・宝物をもたらした。

問題は彼らのとったルートだが、六五四年派遣の一行の「新羅道」については、対馬から始めに朝鮮半島に到着するのが新羅の領域であったことからこう呼ばれ、所謂「北路」を指すものと考えられる。また朝鮮半島西海岸でもソウル周辺の漢江河口は六世紀後半以降新羅の勢力下にあったから、百済が健在な当時でも新羅との関係は重要であったろう。なお、舒明天皇十一年(六三九)九月には新羅の送使とともに、翌年十月には新羅を経由して新羅・百済の朝貢使とともに、留学僧らが帰国している。

六五三年出発の二隻については、大使を務めた吉士長丹が帰国の際に褒賞として「呉氏」に賜姓されており、『日本書紀』では「呉」は中国の特に南朝(江南地方)を示すから、二隻とも東シナ海を横断して江南の地に上陸する「南路」をとったという岸俊男氏の解釈がある<sup>(17)</sup>。また東野治之氏は、『日本書紀』白雉元年(六五〇)是歳条に安芸で建造されたことがみえる「百済船」二隻がこの遣使に対応し<sup>(18)</sup>、二隻にそれぞれ付けられた「送使」は百済へ送り届けるための使者であるとして、後述する六五九年の遣唐使と同様に、両船とも百済沿岸から長江河口付近を目指した

と想定している<sup>(19)</sup>。魅力的な説ではあるが、大使と「送使」とが二隻それぞれに任じられていることからすれば別ルートだった蓋然性も高く<sup>(20)</sup>、帰国時に吉士長丹らに対して用いられている「西海使」という表現(七月丁酉条 同是月条)も、ほかには百済から帰国した使者に用いられていて(齐明天皇二年(六五六)是歳条・同三年是歳条・同四年是歳条)、長丹らは「北路」をとったとも考えられる<sup>(21)</sup>。ただしいずれにせよ、もう一隻の高田根麻呂の船の方は、薩摩半島沖で遭難していることから、「北路」とは異なる航路をとっていたことは間違いない<sup>(22)</sup>。この頃、朝鮮半島西海岸を経由せずに東シナ海を渡る航路を試す必要があったのだろう。五島列島から出発する八世紀の「南路」とはやや異なるが、これを広義の「南路」の始まりと見た方がよいのではなからうか。

六四五年からの唐による高句麗出兵は失敗に終わったが、六四七・六四八年にも征討を行うなど、その後も唐は高句麗への攻撃を企図しており、六五四年に高宗と謁見した遣唐使は、倭国は新羅と近接しているから危急の際には新羅を救うようにとの言葉を受けている(『唐会要』卷九九、倭国条)。百済はこの頃新羅の旧加耶地域に侵攻を繰り返しており、唐からの新羅との和解命令にも応えず、高句麗・百済が連合し、唐・新羅と敵対するという形で朝鮮半島情勢の緊迫が高まっていた。こうした状況が倭国による新たな航路の模索と関連していたと考えたい。

次の六五九年の遣唐使は、六五五年から唐による高句麗出兵が再開され、高句麗・百済に攻め込まれた新羅から救援を求められた唐が百済討伐を準備する中で派遣された。『日本書紀』齐明天皇五年七月戊寅条に載せられ

た「伊吉連博徳書」によれば、大使坂合部連石布、副使津守連吉祥らが二船に分かれ「呉唐之路」に遣わされ、「筑紫大津之浦」（那津）を出発して「百済南畔之島」（『釈日本紀』卷一四所引『海外記』によれば「伊志奈利島」に至り、そこから「大海」（東シナ海）に出たことが分かる。坂合部連石布の船は逆風に遭って辿り着いた「南海」の島で島人に滅ぼされてしまい、なんとか五人だけが逃げて「括州」（浙江省麗水）へ到着し、洛陽でもう一船の一行と合流することができたという有り様だったが、そのもう一船の津守連吉祥の船は、順調に「越州会稽県須岸山」（舟山列島か<sup>23</sup>）に約三日で到着し、余姚県に船を留め越州から早馬に乗って洛陽へ至った。五島列島からではないが、東シナ海を横断しているという点では後の「南路」と変わらない。百済の南畔からの渡海は、対馬海流となる黒潮から北へ分かれた海流の影響を避けられるので、合理的な選択だったのではないだろうか<sup>24</sup>。

なお、彼らは百済征討計画が漏れないよう洛陽で幽閉され、六六〇年の百済滅亡後に帰国することになるが、「越州」を出発して「檣岸山」（須岸山とは別の舟山列島中の島か）よりやはり「大海」に出て漂流し、約九日後になんとか耽羅（済州島）に辿り着いたようである（齐明天皇七年五月丁巳条）。その帰路は明らかに「南路」と称すべきだろう。

その後六六三年に倭国は百済の復興を助けて唐・新羅と戦うものの大敗し、その戦後処理に追われることとなる。その過程で往来した使節、六六五年に高宗の泰山封禪の儀に参列するために唐使劉徳高とともに渡海した遣唐使、六六九年に唐の高句麗平定を賀すために派遣された遣唐使等は、

北路によって唐の都へ向かったらしい。当時高句麗・百済の旧領は唐の領土であり、それが当然の措置であった。その後は新羅が六七六年に唐を追い出して朝鮮半島の統一を成し遂げていく中で、七〇二年に到るまで遣唐使が派遣されることはなかった。

上述したように、大宝の遣唐使からは五島列島から渡海する「南路」の航海が一般的になるが、その前提として、七世紀半ば過ぎ頃の朝鮮半島南岸辺りからの航海があったことが分かる。これは単に航路の面で従来の「北路」と同じとは言いがたか、航海技法、船の規模（構造も準構造船から構造船へ変化したか）等の面でもそれまでとは大きな変化があったと考えられ、むしろ広義の「南路」として扱った方がよいのではないだろうか<sup>25</sup>。そして緊迫した半島情勢がもたらした、この東シナ海を横断する危険な航海に臨むことを迫られた人々は、以前にも増して熱心に航海安全の祈りを行ったと推測される。古代日本列島から大陸への航海の歴史、そしてそれを背景とする航海安全の祈りの歴史として、注目すべき画期は八世紀初めではなくむしろ七世紀の半ば過ぎにあると考えた方が適切であろう（表）。

## おわりに

七・八世紀の遣唐使と沖ノ島および宗像大社との関連を直接に示す史料は残されておらず、むしろ史料上主に遣唐使が航海の安全を祈った対象として知られるのは住吉神であることに注意が必要である。しかし、王権による航海安全の祈りは沖ノ島、宗像三女神の信仰にとって本源的に重要

九	八	七	六	五	四	三	二		一	4	3	2	1	次数
七二七(養老元)	七〇二(大宝二) 六月	六六九(天智天皇八)	六六七(天智天皇六)	六六五(天智天皇四)	六五九(齐明天皇五) 八月	六五四(白雉五)	同 七月?	六五三(白雉四)	六三〇(舒明天皇二)	六一四(推古天皇二二)	六〇八(推古天皇一六)	六〇七(推古天皇一五)	六〇〇(推古天皇八)	出発 西暦(和暦)
藤原馬養(副使)	多治比畠守(押使) 大伴山守(大使)	河内鯨	伊吉博徳(送唐客使) 笠諸石(送唐客使)	守大石・坂合部石積・吉士岐弥・吉士針間(送唐客使)	伊吉博徳(副使)	坂合部石布(大使)	津守吉祥(副使)	高向玄理(押使) 河辺麻呂(大使) 薬師恵日(副使)	大上三田稻 薬師恵日	犬上三田稻 矢田部造某	小野妹子(大使) 吉士雄成(小使) 鞍作福利(通事)	小野妹子	小野妹子	使人
南路?	南路	北路?	北路	北路	南路	北路	南路?	北路?	北路?	北路?	北路?	北路?	北路?	航路
4					2	2	1	1						船数
七一七(開元五)	七〇二(長安二) 一〇月				六五九(顯慶四) 閏一〇月									入京(長安・洛陽) 年月
七二八・二〇	七〇四・七 七〇七・三(粟田真人) 七二八・二〇(坂合部大分)	(不明)	六六八	六六七・一一	六六一・五 (第一船)	六五五		六五四・七	六三二・八	六一五	六〇九	六〇八・四	(不明)	帰国
南路?	南路	北路?	北路	北路	南路	北路?		北路	北路	北路	北路?	北路	北路?	航路
道慈帰国	玄昉・阿倍仲麻呂・吉備真備・井真成ら留学		唐使法聡を百済に送る 唐には行かずか	唐使劉徳高を送る。 唐使法聡来日 六六三・白村江の戦	第一船は往途南海の島に漂着、 大使らは殺される	高向玄理、唐で没	往途、薩摩竹島付近で遭難	唐使高表仁来日	唐使高表仁来日	百済使とともに帰る	高向玄理、僧旻、 南淵請安ら留学	裴世清を送る	随使裴世清来日	備考

表 八世紀第一四半期までの遣唐使・遣唐使一覧表

(註 (14) 東野治之『遣唐使』より一部改変して作成。「航路」の欄のゴシック体の部分は筆者によるもの)

で、重要な海路の守り神である沖ノ島や三女神に対して、遣唐使の航海に  
関わる祈りが捧げられた可能性は十分考えられる<sup>26)</sup>。七世紀後半に位置  
づけられる半岩陰・半露天祭祀遺跡の登場や、沖ノ島、大島および九州本  
島の三宮での共通する古代祭祀（三女神への祭祀）の開始に、遣唐使によ  
る東シナ海横断の開始が関係している可能性はあるだろう。

沖ノ島のみならず大島の中津宮（御嶽山祭祀遺跡）および本土の辺津宮  
（下高宮祭祀遺跡）においても祭祀が明確化すること、すなわち沖ノ島を  
信仰の起源とする宗像三女神への信仰が明確化することは、島々と本土か  
らなる宗像地域における信仰の充実と言える。遣唐使船も航路を問わず宗  
像の海域（玄界灘沿岸）は通過するのであるから、右のような変化が新た  
な形の航海とそれを必要とした対外情勢に対する、宗像地域における対応  
であったと考えることも可能である。

ただし、沖ノ島および宗像地域における様々な変化は、いずれも詳細に  
年代を絞り込める状況には至っておらず、沖ノ島祭祀の変遷や三女神信仰  
の確立が遣唐使航路の変化によって引き起こされたかと判断することは早計  
で、本稿もそのようなことを主張したい訳ではないことを明記しておく。  
七世紀に生じた変化は、東アジアおよび日本列島においても、沖ノ島およ  
び宗像地域においても多岐に亘っている。その中で、沖ノ島と無関係とは  
言い難い遣唐使の航海の変化の画期が、東アジア情勢の緊迫した七世紀半  
ばにあることを明らかにしようとしたのが本稿である。今後の関連する諸  
研究の深化を願いつつ擱筆したい。

（福岡県世界遺産登録推進室）

## 【補記】

本稿は、二〇一八年一月二〇日に行われた九州国立博物館「大宰府学研  
究」事業シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」における発表内容を増補  
改訂したものである。

## 註

- (1) 小田富士雄「沖ノ島祭祀の再検討3」（『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告）  
Ⅲ、二〇一三年。
- (2) 前田育徳会尊経閣文庫所蔵『神宮神宝図巻』。康永二年（一三四三）の遷宮の  
際に描かれた図を応永十七年（一四一〇）に書写したもの。
- (3) 井上光貞「古代沖の島の祭祀」（『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会、  
一九八四年、初出一九七八年）。沖ノ島で先駆的に「律令的祭祀」が行われて  
いたという意味ではなく、「律令的祭祀」として現在研究者が律令と関連づけ  
て理解している祭祀の形態が、実際には日本律令の編纂より早い段階から行  
われていたものだったという意味合いである。
- (4) 金子裕之「アマテラス神話と金銅製紡織具」（『古代都城と律令祭祀』柳原出版、  
二〇一四年、初出二〇〇六年）。ただし、必ずしも雛形紡織具が女神だけに捧  
げられているわけではなく、更なる検討を要すると考える。
- (5) 『宗像大社文書』三（宗像大社復興期成会、二〇〇九年）。
- (6) 宗像市教育委員会『大島御嶽山遺跡』（宗像市文化財調査報告書第六四集、二  
〇一二年）。
- (7) 詳細は本号所載の福嶋真貴子「下高宮を中心とした辺津宮境内発見の祭祀品



について」を参照されたい。

- (8) 下高宮周辺や御嶽山麓の中津宮境内付近からの採集遺物により、三宮での祭祀が五世紀まで遡るといふ想定も可能である(花田勝広「宗像地域の古墳群と沖ノ島祭祀の変遷」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第一五回九州前方後円墳研究会九州大会実行委員会、二〇一二年)。ただし、それらの遺物はそこで祭祀が行われていたこと、ひいてはそれらの場所が特別な場所であったことまでは物語るが、ただちに三女神への祭祀・信仰の存在を証明するものではない。

- (9) このほかに七世紀の沖ノ島祭祀に関する問題点として、御嶽山や下高宮の祭祀遺跡は沖ノ島では八世紀からとされている露天祭祀の状況を呈しているが、御嶽山祭祀遺跡の出土品の一部(金銅製の雛形琴の破片など)は沖ノ島の五号遺跡(半岩陰・半露天祭祀)と共通している点がある。

- (10) 『三国史記』卷二百七十一(武王九年三月条)にも、裴世清が百済の「南路」を通じて倭国に使したという記述がある。

- (11) 倭の五王の時代も百済の領域である朝鮮半島西海岸から山東半島に渡り、南朝の都建康(南京)に至っていたとみられる。倭の五王による南朝への通交開始自体、南朝が山東半島を領有するようになったことが契機と考えられる(川本芳昭「倭の五王による劉宋遣使の開始とその終焉」『魏晋南北朝時代の民族問題』汲古書院、一九九八年、初出一九八八年)。

- (12) 『旧唐書』(卷一九九上、東夷伝倭国条)には、高表仁が倭の王子(『唐会要』卷九九、倭国条などでは「王」と礼を争い、朝命を宣べずして帰国したと記されており、ここでも『日本書紀』に記されない不都合な事案があったと考

えられる。

- (13) 地乗り航法では航海は日中に行われ、夜間や潮待ちのため多くの停泊が行われるが、その分荒天時の退避や食料等の補給が容易である。石井謙治「魏への航海」(『邪馬台国と倭の五王』海外視点・日本の歴史二、ぎょうせい、一九八六年)参照。

- (14) 『万葉集』(二一六二番)および『肥前国風土記』松浦郡値嘉郷条。東野治之「遣唐使」(岩波新書、二〇〇七年)および森公章「遣唐使の時期区分と大宝度の遣唐使」(『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館、二〇〇八年、初出二〇〇六年)などを参照。このほか渤海国を経由する「渤海路」の事例もあるが、臨時のルートと考えられるので割愛する。また「南島路」については、正式に遣唐使の航路として用いられたとは考えにくい(青木和夫『奈良の都』日本の歴史三、中央公論社、一九六五年。杉山宏「遣唐使船の航路について」石井謙治編『日本海事史の諸問題』対外関係編、文献出版、一九九五年)。

- (15) 新羅との政治交渉は継続されており、冊封を受ける新羅が日本による唐への朝貢を阻害するかも疑問であるとして、五島列島の重要性が認識され始めたことを考慮すべきとの見解もある(東野治之「遣唐使船」朝日新聞社、一九九九年。河上麻由子「外国への使節たち」館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報』二、吉川弘文館、二〇一六年)。南路の航海上のメリット・デメリットについては、石井謙治「海上交通の技術」(『平安文化の開花』海外視点・日本の歴史五、ぎょうせい、一九八七年)参照。

- (16) 一般に推古朝は仏教興隆の時代として知られるが、日置部の他に日祀部などを設置し、中央政権の祭祀構造や祭式方法が急速に整備されたのは欽明・敏達

朝から推古朝の頃と指摘されるなど（有働智英「六世紀における日本と百済の神祇祭祀」『日本宗教文化史研究』二〇一、二〇一六年）、神祇信仰における画期であった可能性も考えられる。

- (17) 岸俊男「呉・唐へ渡った人々」（大林太良編『海をこえての交流』日本の古代三、中央公論社、一九八六年）。

- (18) 註(15) 前掲石井謙治「海上交通の技術」は、「百済船」はそれまでに比べ遙かに大型で新たな技術により建造された構造船であるとし、南路啓開を試みたものとみている。一二〇人乗りという規模は、一隻一五〇人乗りの四隻構成で派遣された八世紀以降の遣唐使船と比べてもやや小さい程度であり、本稿もこの見方を継承したい。

- (19) 註(14) 前掲東野治之『遣唐使』。

- (20) 榎本淳一「遣唐使の役割と変質」（『岩波講座 日本歴史』三（古代三）、岩波書店、二〇一四年）。

- (21) 註(14) 前掲森公章「遣唐使の時期区分と大宝度の遣唐使」。ただし他の西海使の事例は派遣時の記録がなく、確言はできない。斉明天皇六年七月乙卯条に、觀毗羅人が本土に帰ろうとして「西海之路」に入ったとあるが、これは東シナ海横断ルートであるようにも思われる。

- (22) 藤田元春「伊吉博徳の書」（『上代日支交通史の研究』刀江書院、一九四三年）。森克己『遣唐使』（至文堂、一九六六年）や註(14) 前掲森公章「遣唐使の時期区分と大宝度の遣唐使」は、根麻呂の船は南島路の開發を行おうとして失敗したという見方を示している。

- (23) 須岸山については、舟山列島の朱家尖島にあてる安藤更生『鑑真大和上伝之研

究』（平凡社、一九六〇年）の見解に従いたい（後述の檀岸山についても同様）。

- (24) 八世紀以後に五島列島から船出するようになった航海においては、当初やや北に流されながらひたすら西を目指したものと思われる。遣唐使ではないが、逆臣とされ官軍に敗れた藤原広嗣は、五島列島（「知賀島」）から東風を得て船出したものの四日後に済州島の付近を航行しており、結局西風が吹き五島列島（「等保知賀島」の「色都島」）に押し戻されてしまっている（『続日本紀』天平十二年（七四〇）十一月戊子条）。

- (25) 註(22) 前掲森克己『遣唐使』は、六五九年の航路を北路で朝鮮半島に至った後の、軍事的緊張による「例外」と捉えており、現在までそのような理解が一般的となっている。

- (26) 『続日本後紀』承和五年（八三八）三月甲申条に、宗像神社などで僧侶に遣唐使の往還の平安を祈らせたことが見える。